

残そう、自然の宝石箱・のりくら

# くらがね通信

No72. (新緑号)

乗鞍岳と飛驒の自然を考える会

2018年4月18日発行

<http://iidalaw.net/norikura.html>

## 第18回総会・環境講演会を開催

3月3日(土)に当会の第18回定時総会が開催されました。平成29年の事業報告及び会計決算報告ならびに平成30年の事業計画・予算案などを審議していただきすべて承認されました。総会の資料等については、8～9ページに掲載してありますのでご覧ください。

また総会に先立ち環境講演会が開かれました。「飛州乗鞍物語～飛州志・斐太後風土記をひもときながら～」と題して、下畑五夫氏にお話をさせていただきました。講演要旨を以下に掲載しました。

### 飛州乗鞍物語～飛州志・斐太後風土記をひもときながら～

下畑五夫

録音文字化：住 壽美子

私の専門は地質学で、高校で地学の教員をしていた。私が教えていたころは火山や地震が穏やかな時代で、大学受験の関係で地学という教科にはあまり重きを置かれなかった。退職少し前に阪神淡路大震災があり、そのころから急に地学に関する世間の注目が出てきた。教員を辞めてからは高山陣屋で古文書を紐解きながら、研究を行っていた。その中から飛州志、飛驒後風土記という優れた地誌を基にして今日は話をする。

乗鞍岳を撮った写真を見ると、平地といくつかの山が写っているが、地形というものは平場と山でできている。山と言ってもそれぞれにでき方は違う。乗鞍岳は高山からも古川からもよく見える山で、飛驒の学校の校歌には必ずと言って良いほど乗鞍が出てくる。乗鞍は飛驒の山と言って良い。江戸時代の谷文晁が文化元年(1804)に出した「日本名山図絵」という本では、88山19座の山を網羅しているが、その中には乗鞍岳は入っていない。そこに更に名山12座を付け加えて「江戸百名山」という本ができた。寛政年間に洩上旭江と言う人が絵を書いたものであるが、その中には「飛驒の乗鞍岳」と書かれている。御嶽山は岐阜県と長野県と半分づつなのに「木曽の御嶽山」、白山も「加賀の白山」、岐阜県を流れているのに「木曽川」と言われているのに、「飛驒の乗鞍岳」と書かれているのは嬉しい。江戸時代には「飛驒乗鞍岳」と呼ばれていたのだろう。

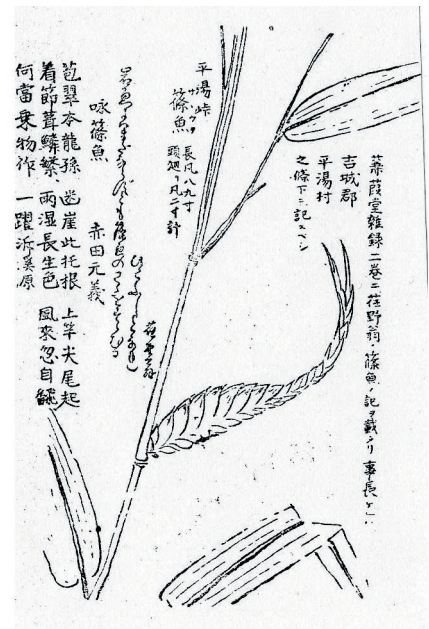


1953年、戦後に出された「飛騨高山」という写真集がある。細江光洋さんが撮られた写真だと思うが、その中に「平安時代位山は乗鞍の事である」と記されている。また安宝山ともいわれ、この山から「紫雲がでた」と書いてあるが、紫雲とは「五色雲」「彩雲」と言われるものである。昔は紫雲が出るとめでたいことがあると言って、元号を変えたともいわれている。乗鞍を上るバスの写真もあるが、戦前に飛行機の試験の為に道が付けられたようである。コロナ観測所等も映っている。その頃は高山駅から頂上までバスで3時間ほどかかった。

明治維新を境に徳川時代とは自然に関する考えが変わり、「和魂洋才」と言われ和の魂で技術的なことは西洋を取り入れるという発想になってきた。ついこの間まで舶来を有難がっていたが、それは明治維新以来での考え方である。

山崎写本の飛州志がある。昔はコピー機がないのですべて書き写したもののだが、山崎という地役人が書き写したものである。飛州志は享保13年(1728)から延享2年(1745)まで高山に在駐した第8代代官長谷川庄五郎忠崇が著したものである。7代までの代官は江戸にいて年1回年貢が集まったところに現地にやってくるという勤務だったが、この代官は家族を連れて高山に在駐した初めての代官であった。長谷川代官は徳川吉宗の命を受けて飛州志を書き始めた。当時の幕府は財政破綻をし始めていたため、調査をして経済を再生するという狙いがあったと思われる。飛州志が完成したころには吉宗は亡くなっており、50～60年後の文政年間(1829年)に幕府に提出された。

私が県の博物館にいたころ、昆虫専門の学芸員から飛騨には昆虫で有名な代官がいたと教えてもらった。この時初めて飛州志を知った。ササウオは笹から出ている、魚の形をしたものである。笹に虫が卵を産んで周りの組織を異常増殖させ、卵からかえったウジが膨らんだ葉っぱ部分を食べ、蛹になって成虫となり出ていくのであるが、江戸時代にササウオは谷に落ちてイワナになると信じられていた。長谷川代官そんなことはおかしいと言って、解剖したりずーと見ていたりしたが、しかし谷川へ落ちて魚になることはないし、又焼いてみたが魚のにおいはいないという事で笹の病気なのではないかといった。ササウオの原因であるササウオタマバエは、2～3mmくらいのとても小さな虫で、当時は分からなかった。これが分かったのが大正の頃である。この虫の学名に長谷川代官の名前が使われて「*Hasegawaia sasacola*」という。



飛州志巻第一土地部の「嶽」には 乗鞍岳は高山、国府より辰の方角にあると書いてある。さらに絵師を頼んで飛騨山脈の絵を書いている。飛州志には乗鞍岳は「神祠部」に書いてあり、乗鞍権現として記載されている。内容を見ると、乗鞍権現は乗鞍岳にあり誰を祀ってるのかこの時代(享保年間)はわかっていない。この山は飛騨第一の高い山で、益田郡、大野郡、吉城郡の3郡にまたがっており、山麓は阿多野郷、小八賀郷、高原三郷に連なり、後方は信州に連なっている。山頂には窪みがあり鞍に似ているので乗鞍岳となづけられた。頂上を御前といって祠があると伝えられているが、誰も行って拝したことがない。とても高い所なので、人が行ったことがないと言われている。夏でも根雪がある。麓から2～3里(約8～12キロ)の辺りにはいろいろな木があるが、それより上には3～4尺(約90～120cm)のもみの木がある。岩はなめらかで草柘植がたくさん生えており苔のように見える。這松が地面を覆っている。歩くにはその上を踏んでいかなければならない。浅間山のように土石山水は赤い色をしている。半腹より上の所に2.6km×500mくらいの高原がある。この広場の傍らに2mくらいの穴が二つ開いており、臭気が強く目に入ると痛い。これより更に上ると、海浜のような清浄な景色になるが、砂に交じって焼石も見られる。その石間から冷たい水が湧いている。臭気更に強く目も痛く

てあけられないほどになり、これ以上上には行けない。飛驒の人は乗鞍禪定と言って夏に登るが上までは行けず、山腹にある遥拝所で拜んだ。土地の者が言うには、上には沼池の数が48ある。それらはニゴリ池、アオタル池、アカ池、カミノ池、シモノ池、野の池、ヒウチ池、スナバチ池、マカリ池、ヒラ池、ツチドヨ池、雄池、雌池、ヲウニウガ池。これら十三の池は名前が分かっているが、他は名前所在はわかっていない。中でもヲウニウガ池は、高原郷の村人が数百人干ばつの時に雨乞いの為に上る。蓑傘を持って鉦と太鼓をたたいて登っていると、池まで登るまでに大雨が降ってくる。池のほとりまでは中々行けなかったが、円空が仏像を沢山沈めたら魔物が静まって、池のほとりまで行けるようになった。中々近寄りがたい山であったことが分かる。またライチョウがいて神の使いと言われている。ライチョウを捕って将軍家に献上している。ライチョウが何を食べているか腹を裂いて調べ、適したものを食べさせて、生きたまま届けた。

以上のように飛州志には祭神の事、乗鞍禪定の事、乗鞍の名前の由来、下界とは違う植生のこと、穴があって臭気がひどい事（この頃は硫化水素の噴気活動が盛んだったと思われる）、山上の48か所の沼地の事、雨乞いの事、円空の事、ライチョウの事が書いてある。幕末に出た飛驒後風土記にはほとんど飛州志に書いてあることが出てきている



飛驒国惣山絵図：明和9（1772）年

明和9年（1772）大原代官の時代に作った「飛驒国惣山絵図」という地図がある。6mにも及ぶ大きなもので、もともとは高山陣屋にあったが、明治維新後様々な文献が散逸した時にこの地図も散逸し、残ったものは岐阜の歴史資料館に保存してある。乗鞍岳の部分を見てみると、守山と言って山麓の村々で管理する区域があり、字（あざ）ごとに生えている木の種類が全部書いてある。更に木の名前が書いてあるところ、草山

と書いてあるところ、雑木と書いてあるところの大きく分けて3種類がある。又「御留山」という記載があるが、これはお上が伐採を禁じた山、つまり村人の出入りを禁止した山である。江戸時代においては、山は全部幕府のものであるという意識であった。なぜ御留山にしたかという、当時江戸ではよく火事があり、その都度材木が必要であった。江戸近辺の山の木は切りつくされていた。東海道五十三次の箱根の絵を見ると、痩せた松が描かれている事からもうかがえる。当時飛驒の山の木は殆ど江戸へ運び出されていた。幕府が金森から取り上げて飛驒を管理し始めた大きな原因は山林資源である。幕府は飛驒の山の森林保護の為に主なところは留山にした。又私は鷹の研究もしたが、鷹の営巣地になっている山も御留山にした。

昔伐った木は川へ流して江戸まで運んだが、山之村などの富山湾へ流す北方では、下関、紀伊半島を回っていかねばならず大変だった、一方南方では益田川～飛驒川～木曽川～伊勢湾へ流してそこで船に積んで江戸へ運んだ。金山あたりで網場（あば）と言って全材木を集め、1本1本調べて刻印を押して流していた。

当時どんな木が生えていたかという調査が行われ、明和3年（1766）の「山内有木木数惣寄せ」という文書があるが、これには樹木ごとに1本ずつ数えて記録してある。この中でびっくりしたのはスギである。乗鞍岳にはモミ、ツガ、トウヒが多く、クロベ、サワラ、ヒノキもある。スギは2か所に記載があり数が少なく、飛驒中で2千本か3千本である。

丹生川で出した「乗鞍岳に息づく大自然」という細江光洋氏の写真をもとに書かれた本に、「明和2年（1765）の乗鞍岳西麓が噴火し、泥海となる」と書いてある。これは何の文献に書いてあったのか分からない。ネットで調べたら、アジア航測の火山防災課長荒井健一氏が、火山防災協議会で、「乗鞍岳500年前に噴火。地質調査で判明」という話を昨年3月に市民文化会館で話をし

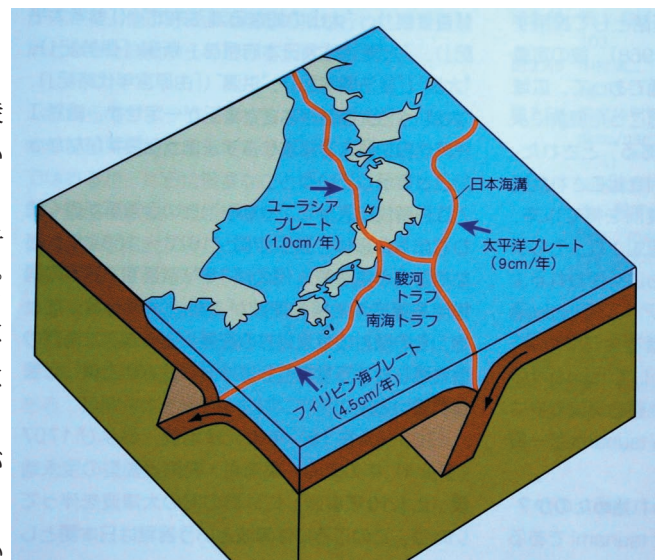


噴火である。乗鞍岳の断面図をみると下の方にあるのが堆積岩である。これは海の底にたまってできた地層で、この中に石灰岩があって、これは1億年位前のサンゴ礁で、南の方にあったものがだんだん日本の方へやってきて上へ上へと押し付けられて山ができた。今も太平洋の方から押しつけていて地震が起きる。もともとは海面より下にあった中生代にできた基盤の地層が2000～2500mくらいまで上がってきて、その上に乗鞍岳火山が乗っかっている。千町は非常に古い。烏帽子岳が最初に噴火して、高天原、四岳、恵比寿岳、権現池と徐々に噴火してできた山である。これらが一か所で噴火したとすると富士山みたいに高くなったはずである。

乗鞍岳は大きく分けて古期と新期に分かれる。千町は90万年前、烏帽子岳は21万年前、ちょっと遅れて高天原である。岩石に含まれる放射性元素を調べて何万年前に冷えて固まったかが分かるが、調べてないので詳しくは分からない。四つ岳は6万年前である。岩石学的にはだいたい9千年前に最後の溶岩流が起きて、その後は小規模な水蒸気爆発が起きている。数年前に起きた御嶽山の爆発は近くに人がいたので被害が出たが、地学的に言ったら少し経てば噴火の痕跡はなくなってしまう程度の爆発であった。火山活動のランク付けでは乗鞍岳はC、焼岳と御嶽山はBである。

同じ火山でも噴火の仕方で山の形が全然違う。溶岩がかたいと溶岩円頂丘ができ焼岳がこれである。もう少し柔らかいと乗鞍や富士山の成層火山、もっと柔らかいと楯状火山で伊豆大島のように自動車で登っていける。

表面がかたいプレートで卵の殻のようにいくつか割れている。それが日本までハワイを乗せてやってきている。ハワイは年間9cmくらい日本に近づいている。フィリピン海プレートもこちらに来ている。ユーラシアプレートは反対側から押してくる。太平洋プレートやフィリピン海プレートは下にもぐり、上に載ったものは押し付けられる。引っ張り込まれたプレートは跳ねて断層が出来る。それでこの間起きたような津波が起きる。7千年位前にもあったことが分かっている。

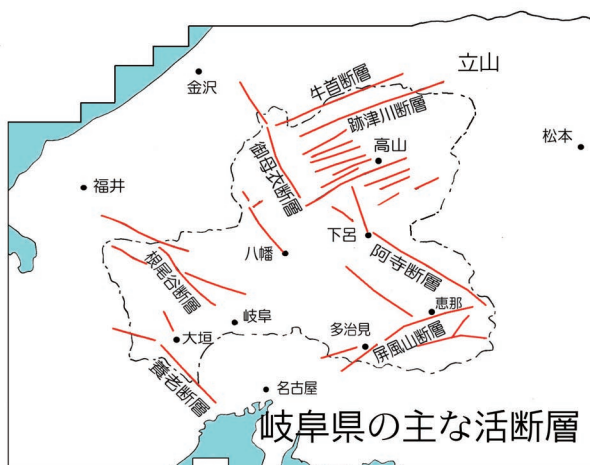


今東南海地震が起きることが問題になっている。今から200年前に起きた事がわかっている。地震と火山は兄弟でみたいなもので、プレートが潜り込んでこすれて割れて地震が起きる。もぐり込んだ岩と水も一緒に入っていくとある深さで岩が溶け、軽くなりゆっくりマグマが上がってきて噴き出す。マグマが下であって上の地下水を温めて爆発すると水蒸気爆発となる。

飛騨地方には沢山断層がある。その中の跡津川断層は安政5年に飛越地震となった。角川、宮川、富山の立山等山が崩れるなど大変な被害があった。その被害調査である「飛州村々地震一件」が陣屋に残っている。

飛騨山脈の下にはまだ熱いマグマがあり、上の方は固まった。これが滝谷花崗岩で上ってくるスピードは世界一であり、世界一若い花崗岩である。花崗岩は中の方でゆっくり固まって、上昇し風雨で侵食されて表に出てくる。

マントル対流がありプレートが動いてる以上、地震が起きる。地球上の様々な地殻の現象はマントル対流がもとで起きる。昨年乗鞍岳の噴火



に備えてハザードマップが作られたが、こういうのをやりすぎると、人は他人任せになってしまう。我々は自分の五感を大切にすることが必要で、昔の人は空を見て天気が良くなるかどうか判断した。昔の農業はお天道様任せで、稲刈りや稲核の日を決めた。それは空を観察していないと出来ないことだ。現代人は自然と遊離してしまっていて、そういうことが出来なくなってしまった。これからは、噴火の兆候もあるので、身の回りのことを五感を働かせてやっていかななくてはならないと思っている。

人間は変わった動物で縄文時代くらいまでは食物連鎖の中に入っていた。有るものを食べて生きていた。ところが弥生時代になって農業を始めてから自然界のものをかき集めるようになった。最初は森林資源をかき集めて燃料にしたり、建材にしたりした。それはつい最近までやっていた。そして森林が破壊されて来た。脳が発達し、言葉を作り文字を作った。言葉は他の動物にはない働きをする。時間と空間を超える。これだけが独り歩きをする。いってみれば我々は言葉で出来た仮想の世界に住んでいる。つまり脳の世界に住んでいる。

日本列島は火山と地震からは逃れられない。火山列島の住民でどうやって生き延びるかを考えるより仕方がない。人間は脳が非常に発達していて、他の動物とは違うわけで、時間に縛られている。ジオパークとは地球、自然中でその恵みを受けて動物は生きていて、これを地域資産として保護活動を行ったり、自然の意味について教育をしながら、自分たちの土地に誇りが持てるよう持続可能な開発を進めるプログラムである。

日々の生活において常に心掛けていないと温暖化などを招いてしまうので、出来る事からやっていくことが大切である。地域の恵みを大切にしながら持続可能な活動を行っていく。

## 飛騨の峠【その4】

木下喜代男

### 龍ヶ峰峠（標高約 1120m）―旧郡上街道の忘れられた峠

往来した多くの人々の哀歓を見つめてきた峠、日常から非日常への境界である峠への関心は尽きない。明治初期の旧郡上街道には、先回紹介した有巢（あっそ）峠のほか、西ウレ峠、坂本峠があった。現在もせせらぎ街道にある西ウレ峠は、明治のはじめに開通した新道につくられた峠で、それ以前は二俣集落から中野集落を通して、東にあった龍ヶ峰峠を越えなければならなかった。

この峠、積雪期に遭難死する者がいて『飛騨國中案内』には飛騨では野麦峠とならぶ難所とある。道が険しいとの理由で西ウレ峠に役目を譲ってしまったこの峠道をいちど歩いて見たいと思っていたところ、昨年（平成 29 年）の 4 月下旬、筆者と同じ峠に興味をもっておられる西高校教諭 S さんのお誘いで実現した。S さんのご友人 H さんも参加。

車で川上川沿いのせせらぎ街道を走り、二俣で支流の中野川沿いの林道に入る。しばらくすすむと地形が開け、中野集落へ出る。ここには昔数軒の家があったというが、今は上野さんという家が 1 軒のみ残っており、雪が無い時期だけ高山から畑仕事にきておられる（写真 1）。昔は旅人を泊めたそうだ。中野川に沿った林道を 30 分ほど歩くと右手の笹原の中に大きい木があり、その根元になにかあるのを H さんが発見。近づいてみると、石で積んだ祠のなかに男根状の石が祀ってあった（写



写真 1



写真 2



写真 3



写真4



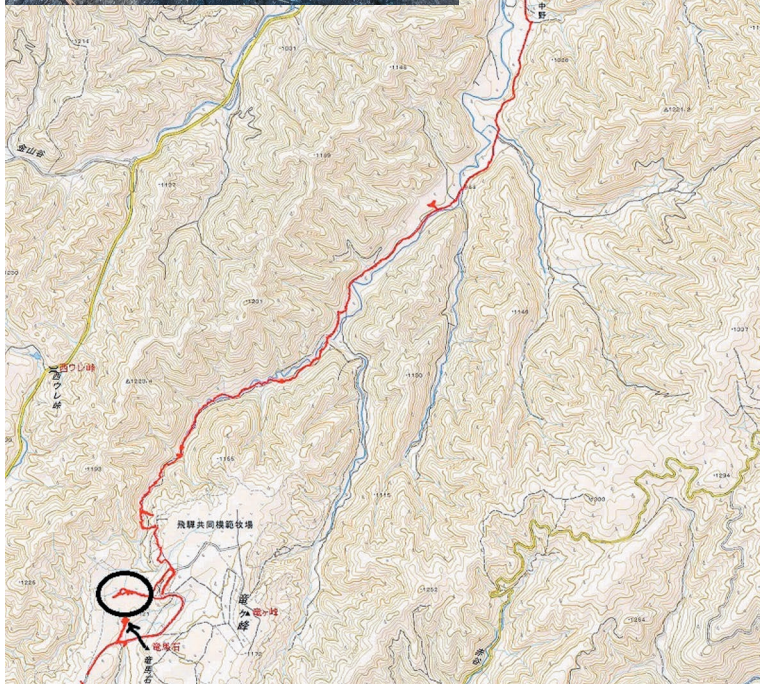
写真5



写真6



写真7



真2・3)。これは村の入口などに村の守り神として祀られていた道祖神（塞の神）であった。村人が子孫繁栄や厄災の侵入防止等を祈願する道祖神にはいろんな種類があるが、男根型は珍しい。縄文時代の男根崇拜の名残が道祖神という形で今に伝えられており、道祖神としては古い部類であるようだ。昔インドの街角で見たヒンドゥー教の「リング」を思い出した。そして道祖神の前には旧街道の形状が一部残っていた。

この龍ヶ峰峠（龍ヶ嶺）は、天正13年に金森長近・可重父子が飛騨へ侵攻した時、可重勢が三木勢と攻防戦を行った場所である。三木勢は急峻な地形を利用して優位に立ったため、可重は撤退、迂回をした。その後郡上青山藩の武装兵団が二度（江戸期の大原騒動と明治維新）も高山へ押し入ったときもここを通った。往時をいろいろ想像しながらの街道歩きはまことに楽しい。

このあと谷は二つに分岐し、林道は左へ。旧街道は右の谷へ入り、すぐ右岸へ渡る。ここからは随所に街道の形状が残っていた（写真4）。途中地形が急峻な部分は道が何か所も崩落していて、そのたびに谷を降りてまた登る（写真5）。こんな地形のところで三木の伏兵が大石を落としてきたと軍記にある。

次第に水流が細くなり、街道はそのまま水流に沿って分水嶺へのびているはずだが、ヤブがひどいので途中で左の枝沢を登ると牧場へ出た。広い牧場の中を歩き、分水嶺伝い（と言っても平坦な地形）に峠であったと思われる場所を探したが、地藏様などは見つからなかった。

ここを越えたところに有名な竜馬石がある（写真6・7）。『斐太後風土記』などの文献でも、街道はこの石のそばを通っている。竜馬石は岩肌一面にある亀裂状の模様が馬の轡や茸毛の模様などに見えるので、龍馬伝説（※）が生まれた。この竜馬石、近年「ペトログリフ」（古代岩刻文様）の研究家が「古代人が人面を刻んだ痕跡が見つかった」などと発表し、新聞に出たことがある。なおこの竜馬石、近年の2万5千分の1の地形図には牧場道路の南側に記載してあるが、実際は道路の北側にある。

旧街道はこの石の横を通って楢谷集落へと下るが、ルートは太い笹に埋もれていて歩行は無理なのであきらめ、牧場内の舗装道路を辿り、麦島のせせらぎ街道へ降りる。Sさんの奥さんに車で迎えに来てもらい、西ウレ峠を越えて帰った。珍しい道祖神を見、残っている街道を味わって、久々にいい峠歩きができた。

※龍馬伝説：神様の使いで、川上岳から白山の女神のところへゆく竜馬が、ここで道草を食い石になってしまった。

< 参考—この峠の記述がある文献 >

『飛州志』長谷川忠宗「龍ヶ峰峠榎谷村ニアリ」

『斐太後風土記』富田礼彦「龍馬嶺 中野村と榎谷村の堺の大山也 山嶺に龍馬石あり」

『飛騨國中案内』上村木曾右衛門「中野より榎谷村迄の間【龍ヶ峯】といひて難所の大峠あり」

\*\*\*\*\*

(資 料)

## 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 第18回総会

2018年3月3日(土) 高山市民文化会館

### 1. 平成29年会務・事業報告

#### ※会務報告

1) 会員状況 平成30年1月末会員数 個人・家族会員：98 団体：4 計102

2) 会議関係 総会：平成29年3月18日 運営委員会：概ね毎月1回開催

#### ※事業報告

##### 1) 環境講演会

3月18日 「立山のライチョウ」～データから見る繁殖・生息数など～

講師：松田勉氏(富山県雷鳥研究会)

##### 2) 自然観察会

6月4日 乗鞍岳自然観察会

6月25日 里山こみち石仏探訪(松之木町地区)

7月16日 水生昆虫調査(川上川・宮川)

##### 3) アサギマダラマーキング会

8月27日 御嶽山麓チャオスキー場周辺

##### 4) 出前講座「自然観察会」

9月23日 会場：一之宮町刈安峠一帯 講師：小野木三郎

5) くらがね通信(季刊)の発行 1月、4月、7月、10月(No.67～70)

6) 第8回乗鞍フォーラムに出席 8月11日(乗鞍岳)

7) 提案書提出(高山市長宛)

10月23日 宮川へのコイ類放流中止について

### 2. 平成29年 収支決算報告

#### <収入の部>

|           |     | 金 額     | 備 考          |
|-----------|-----|---------|--------------|
| 平成28年繰り越し |     | 234,227 |              |
| 会 費       | 個人  | 132,000 | @ 2,000 × 66 |
|           | 家族  | 36,000  | @ 3,000 × 12 |
|           | 団体  | 25,000  | @ 5,000 × 5  |
| 雑収入       | 講師料 | 10,000  | 位山自然観察会      |
| 合 計       |     | 437,227 |              |

### <支出の部>

|     | 金額      | 備考               |
|-----|---------|------------------|
| 会議費 | 4,600   | 文化会館使用料等         |
| 通信費 | 51,392  | ハガキ・切手等          |
| 事務費 | 5,297   | 封筒・ラベル・コピー等      |
| 印刷費 | 76,680  | くらがね通信（年4回）発行等   |
| 事業費 | 94,608  | 講師謝礼・交通費・お茶代・保険等 |
| 合 計 | 232,577 |                  |

437,227 円（収入）－ 232,577 円（支出）＝ 204,650 円（次年に繰り越し）

### <監査報告>

監査の結果 適正に処理されているものと認めます

平成 30年 2月 / 日

向田 真一  
米澤 智子

### 3. 平成 30 年事業計画

- 1) 第 18 回総会 平成 30 年 3 月 3 日
- 2) 環境講演会 平成 30 年 3 月 3 日
- 3) 自然観察会 乗鞍岳、石仏探訪、水生昆虫調査、御嶽山等
- 4) アサギマダラマーキング会 9 月初旬 講師：鈴木俊文さん
- 5) 公開講座「自然談話室」、学習会、出前講座等 随時
- 6) くらがね通信（季刊）の発行 1 月、4 月、7 月、10 月（No.71～74）
- 7) 要望書・提言書などの提出

### 4. 平成 30 年予算

#### <収入の部>

|     | 金額      |
|-----|---------|
| 繰越金 | 204,650 |
| 会費  | 193,000 |
| 雑入  |         |
| 合計  | 397,650 |

#### <支出の部>

|     | 金額      | 備考 |
|-----|---------|----|
| 会議費 | 5,000   |    |
| 通信費 | 55,000  |    |
| 事務費 | 10,000  |    |
| 印刷費 | 80,000  |    |
| 事業費 | 100,000 |    |
| 予備費 | 147,650 |    |
| 合計  | 397,650 |    |

### 5. 役員選任 （全員留任と承認されました）

### 6. その他

# 今年の事業予定 (5月～9月)

## ☆乗鞍岳自然観察会

6月3日(日)(小雨決行)

集合：朴の木平スキー場駐車場 午前7時20分(15時頃解散予定)

持ち物：お弁当、飲み物、防寒具、雨具等(必携)

服装等：歩きやすい軽快な服、トレッキングシューズ

乗鞍岳で自然観察、ライチョウに会いに行きます。朴の木平からはシャトルバスで畳平駐車場まで行きます。

## ☆水生昆虫の調査

7月22日(日)

集合：市民プール駐車場(赤保木町) 午前9時(小雨決行、増水時中止)

服装：濡れても良い服装&足もと(午前中に終了予定です)

今回で3回目の調査です。川の様子や水生昆虫がどんな状態か調べてみよう!

## ☆植樹作業

5月13日(日)

集合：午前9時30分、道の駅飛騨たかね工房

持ち物：お弁当、飲み物、軍手、長靴(当地は湿地です)

「ギフチョウの翔ぶ里山の自然を考える会」主催の、クロツバラの植樹作業のお手伝いをします。クロツバラ(クロウメモドキ科)は岐阜県の絶滅危惧種に指定されている「ヤマキチョウ」の食樹です。今回の作業は、アサギマダラのマーキングでお世話になっている鈴木さんの呼びかけに応えるものです。作業道具は主催者の方で準備します。参加される方は保険を掛ける都合上4月末までに松崎までご連絡(氏名・生年月日・住所)ください。

## ※各行事の問い合わせ先：

松崎(090-4214-5208、ponykun0428@hidatakayama.ne.jp)

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円

あなたの知人、友人に入会をおすすめください

・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第72号(新緑号) 2018年4月18日発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋

TEL: 0577-32-7206・FAX: 0577-32-7207

下記URLのページからくらがね通信のバックナンバーが閲覧できます。

★<http://iidalaw.net/norikura.html>

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：松崎 茂

E-mail: ponykun0428@hidatakayama.ne.jp TEL: 0577-34-4703

表紙写真提供：小池 潜

印刷：山都印刷